

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第179集

宮裏遺跡 III

平成19年度 (主)島田吉田線緊急地方道道路改革事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第179集

宮 裏 遺 跡 III

平成19年度 (主)島田吉田線緊急地方道道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 7

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第179集として『宮裏遺跡Ⅲ』をここに刊行する。

宮裏遺跡は静岡県島田市阪本に所在し、大井川右岸の牧之原台地上に立地する。当遺跡周辺には、『延喜式』に記載されている敬満神社が鎮座している。また、高根森古墳群や竹林寺廃寺跡など学史上著名な遺跡が数多く分布する地域でもある。

静岡県埋蔵文化財調査研究所は平成9年度から平成13年度、平成15・16年度にかけて、島田吉田線緊急地方道道路改築事業に伴い宮裏遺跡の発掘調査を実施してきた。これらの調査成果は、『中原遺跡 宮裏遺跡』『宮裏II遺跡・高根森遺跡・高根森古墳群』として報告書を刊行している。

今回の宮裏遺跡の調査では、牧之原台地上に展開する古代集落の様相を追加する資料を得た。今後は周辺遺跡の調査成果と併せて、精緻な分析が必要となる。本書が日本古代史の解明に寄与するだけでなく、地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となることを願って止まない。

最後に、発掘調査ならびに本書の作成にあたり地元の皆様、静岡県島田土木事務所、島田市教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位に、多大な御理解と御協力をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げたい。また、現地作業、資料整理に関わった作業員諸氏の労苦に対しても謝意を表す次第である。

2007年9月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

- 1 本書は静岡県島田市日本に所在する宮裏遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、(主)島田吉田線緊急地方道道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県教育委員会の指導のもと、財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 宮裏遺跡は過去2次にわたる発掘調査が実施されている。本書において報告する調査を3次調査とする。
- 4 調査体制は次の通りである。

所長 斎藤 忠	常務理事事務局長 清水 哲
事務局次長 大場 正夫・佐野 五十三・鶴見 保幸・及川 司 (調査課長兼任)	
調査課課長 河合 修	調査研究員 平塚 翁久・丸杉 俊一郎
- 5 本書で使用した座標値は、日本測地系(旧測地系)に準拠した。
- 6 本書の執筆は第1章2を平塚、それ以外を丸杉が行った。また、編集は丸杉が担当して、財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 7 発掘調査資料及び出土遺物は、静岡県教育委員会が保管している。

目　　次

序	
例言	
第1章 序　　論 1
1 調査経緯 1
2 地理的・歴史的環境 2
第2章 調査成果 3
1 検出構造 3
2 出土遺物 7
第3章 総　　括 8

図版

報告書抄録

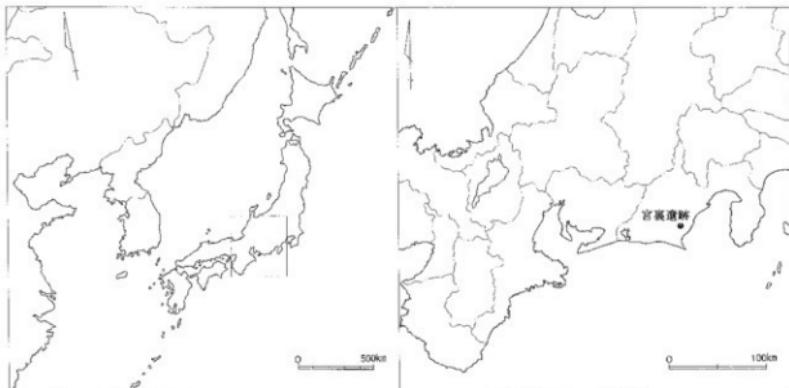


Fig. 1 宮裏遺跡の位置

第1章 序論

1 調査経緯

宮裏遺跡は、静岡県島田市阪本に所在する遺跡である。遺跡は牧之原台地上の北東端に派生した台地上に立地しており、この地域は日本有数の茶産地として著名である。

牧之原台地東側の県道島田吉田線は、高度経済成長による住環境の変化・交通量の増加・東名高速道路吉田インターチェンジにより、交通集中に起因する慢性的な渋滞が生じるようになってきた。このような交通障害を解消する目的で計画されたのが、県道島田吉田線緊急地方道道路改築事業である。この新道路路線は、島田市旭町から新たに島田大橋を設置し、牧之原台地上を南東方向に縱断するものである。

牧之原台地上には旧石器時代から近世に至るまで断続的ではあるが、人為的活動の痕跡が残されている。県道島田吉田線緊急地方道道路改築事業に伴う発掘調査は、島田市教育委員会により1980年代末以降継続的に実施されている。特に宮上遺跡では「驛」と記された墨書き器が確認され、初倉驛家との関連が注目された。さらに、宮上遺跡では瓦・蝶瓦・近接する青木原遺跡では円面鏡が出土している。1990年代後半からは同事業用地内で財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所による発掘調査が実施され、中原遺跡・宮裏遺跡・高根森古墳群などが調査されている。中原遺跡・宮裏遺跡では古墳時代後期から平安時代の竪穴建物が多数検出され、

高根森古墳群では7世紀中葉頃に築造された横穴式石室墳が2基検出されている。高根森遺跡では16世紀代の銅鑼が出土しており、物資の集散地として機能していたと想定されている。これらの調査により、古代の牧之原台地上に展開した遺跡群の新たな知見が集積されてきている。

本書で報告する宮裏遺跡も同様の事業に伴い発掘調査対象となった遺跡である。2007年、道路改築事業は東海道新幹線線路高架橋を建設する段階に到達した。そして、1999年に調査が行われた宮裏遺跡3区北側が建設予定地として計画されたため、静岡県島田土木事務所との協議を経て、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が発掘調査を実施することになった。調査期間は2007年4月13日～5月12日にかけて実施した。調査面積は242m²である。

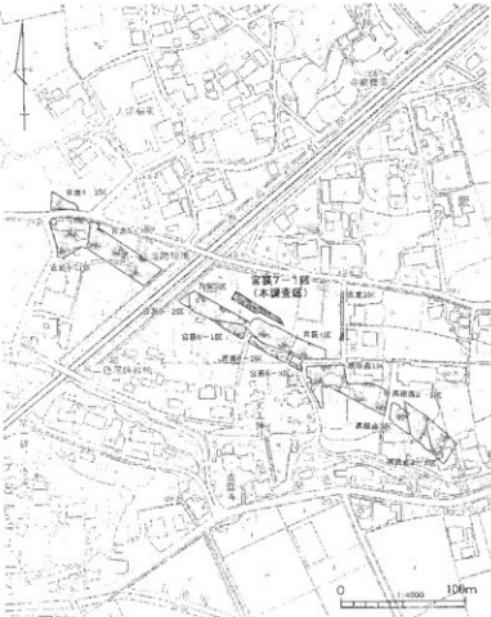


Fig. 2 調査地点の位置

2 地理的・歴史的環境

地理的環境 宮裏遺跡が所在する島田市は人口97,160人、面積195.4km²（2006年12月末現在）の都市である。東京都心より南西約160km、名古屋市中心部より東南東約120kmの距離にあり、静岡県中西部に位置する。市内は大井川がほぼ北から南に縱断するように流れ、市の中心部はこの大井川下流に形成される扇状地の扇頂部にある。当遺跡は、JR島田駅の東南東4.5km、大井川右岸の島田市阪本に所在し、牧之原台地の東北端に派生した台地上標高45m付近に位置する。

歴史的環境 旧石器時代から縄文時代の遺跡は台地上の平坦部を中心に青木原遺跡、御小屋原遺跡、犀敷原遺跡などが散見される。宮裏遺跡から東に3km程離れた東鎌塚原遺跡では縄文時代の多角形住居が検出され、近辺でも竪穴建物跡が確認されている。しかし、遺物のみ単独で出土した資料が多く、その全体像は明らかではない。弥生時代の遺跡は調査例が少なく判然としない。

古墳時代の遺跡は平野部を見通す傾斜地に分布するが、多くは横穴式石室をもつ古墳時代後期の円墳で直径10m前後である。谷口原古墳群には全長21.5mの前方後円墳である愛宕塚古墳が位置し、1959年に調査された。周辺では金銅装馬具や金銅製頭椎大刀が出土した高根森古墳群や鉄地金銅張馬具が出土した御小屋原古墳などが調査されている。青木原遺跡、中原遺跡等の集落遺跡では竪穴建物が検出された。

律令期の当地は遠江国薬原郡に含まれる。台地上では宮上遺跡で「驛」と記された墨書き土器や螺髪、青木原遺跡で円面鏡が出土しており、初倉驛家のとの関係も考えられる。また湯日川流域の台地上には、奈良時代初期の創建と考えられる竹林寺廃寺跡や寺院に瓦を供給した南原瓦窯跡、六千ヶ谷瓦窯跡が存在する。竹林寺廃寺跡は金堂、講堂、塔などの伽藍跡が確認され、文化的な中心地であった可能性が指摘される。

平安後期に入ると賀佐莊の領域となる。湯日川上流に窯業遺跡の丸山古窯跡、集落・祭祀跡が発見されたミヨウガ原遺跡が確認されている。隣接する高根森遺跡では中世の棹秤用鍤が出土しており、当地域の歴史的様相が徐々に明らかになってきている。



Fig. 3 周辺遺跡分布図

第2章 調査成果

1 検出遺構

(1) 調査の概要

調査地区的設定 宮裏遺跡の推定範囲内は、少数の宅地と広大な茶畠が広がっていた。当事業を除く顕著な土地の改変は、これまで東海道新幹線建設工事以外行われていない。この東海道新幹線により、宮裏遺跡は東西に分断されている。本書で報告する宮裏遺跡の旧状は茶畠であった。また、すでに道路改築事業による発掘調査が完了した範囲では、道路建設が着実に進行していた。

今回の発掘調査は1999年に行われた宮裏遺跡3区の北側に位置している。過去の調査区には調査次数ごとに連番が付されており、今回の調査区は東海道新幹線高架橋建設工事用地の北半部分が対象であるため宮裏遺跡7-1区とした。調査対象面積は242m²である。

基本層位 宮裏遺跡における堆積層位をFig. 4に示す。I層は耕作土である。II層は黒褐色土であり、遺物は殆ど含まれていない。III層は暗茶褐色土であるが、II層との岐別は困難である。IV層は粘性・しまりが若干強く、調査区東側のみに広がる堆積土である。遺物量は少ない。

IV層は黄褐色土である。遺構検出はIV層上面で行った。遺構は比較的明瞭で、検出作業は容易であった。牧之原台地上に展開する遺跡群の多くは、このIV層で遺構を検出しておらず、広域に認めることができる。IV層上面は調査区においては西側が高く、東側に向かうほど低い傾向にある。したがって、西側を高位面・東側を低位面と位置付けられる。

IV層の下位は牧之原疊層及び色尾疊層が広がる。これらは牧之原台地を構成する大井川河川堆積物である。

宮裏遺跡の堆積土壤はこれまでの調査成果と基本的に変わらないが、本書では「中原遺跡 宮裏遺跡」の基本層位を踏襲した(勝又2002)。しかし、II・III層は明瞭に分別できないとする指摘もあり(井鍋2006)、今回の調査でもこの見解を首肯し得る堆積状況であった。その成果を勘案すれば、宮裏遺跡では今後基本層位を捉え直す必要が生じるであろう。

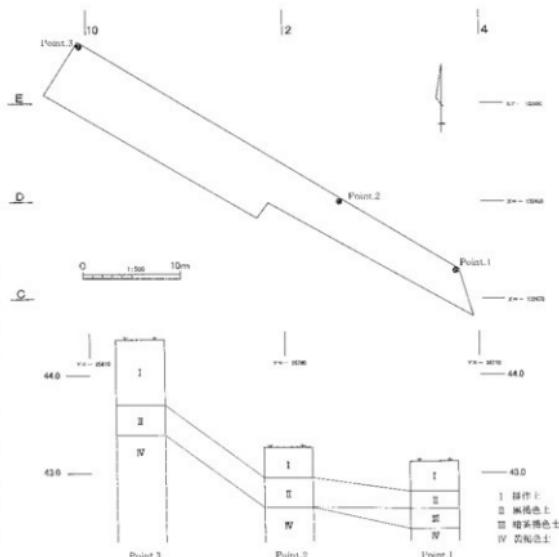


Fig. 4 宮裏遺跡の基本層位

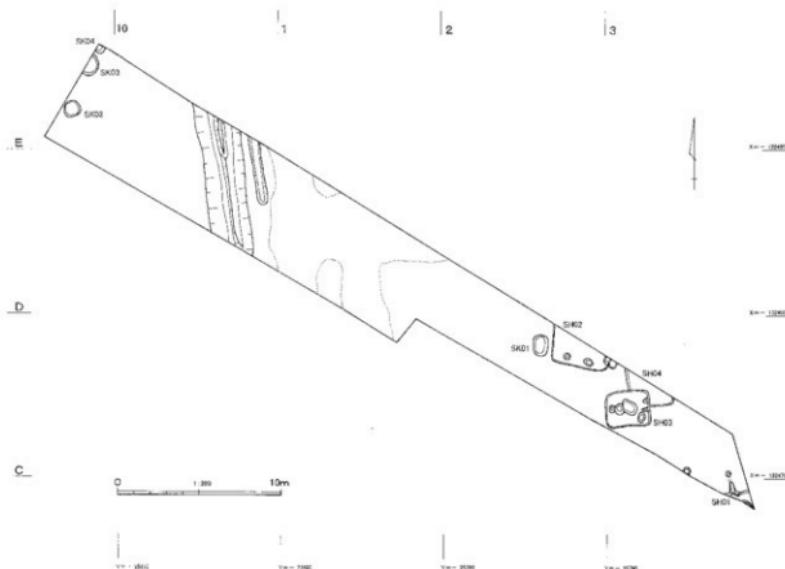


Fig. 5 検出遺構

(2) 検出遺構

概要 検出された遺構は竪穴建物4軒、土坑4基、溝、小穴であり、遺構の時期は大きく古代と近世に分けられる。竪穴建物は、調査区東側の低位面において確認できた。出土遺物から判断して、これらの竪穴建物は8～9世紀代と推定される。土坑は出土遺物が少なく時期的な中心は判然としないが、これまでの調査成果を勘案すれば近世の土坑墓である可能性が高い。溝は高位面と低位面の境界に位置しているが、近世以降に帰属するものと推定される。

SH01 調査区の東端で検出された竪穴建物である。建物北壁の一部、及び窓部分が検出されたのみであるため全体規模は不明である。しかし、検出位置は宮裏遺跡3区SB-12の北側延長部分に該当するため、これを同一遺構と判断すると南北約4mの規模と推定される。検出面からの深さは30cmであった。床面には明確な貼床は認められないが竪の周辺に小穴を検出しており、竪との位置を考慮すれば竪から搔き出した炭・焼土を詰めた可能性を指摘できる。

竪は建物北壁に構築されている。袖部は右袖基底部が僅かに遺存したのみである。煙道は中軸線上に位置するものと推定され、床面から4cm程の高さからはじまり1.3m程伸びる。煙道は先端に向かって次第に幅を狭めながら低下し、先端部はピット状に深く掘り込まれている。煙道の天井部は一部良好に遺存していた。支脚や抜き取り穴、焼面は確認されなかった。煙道両側面、及び煙道先端南側は赤変していた。

出土遺物から8世紀後葉頃の建物と判断される。

SH02 平面形が隅丸方形を呈する竪穴建物と推定されるが、建物南壁と西壁の一部を検出したのみで大半は調査区外となる。床面上には小穴が確認できるが、貼床・壁溝は検出されなかった。

出土遺物が少なく帰属時期を明確にするのは躊躇せざるを得ないが、暫定的に9世紀前半頃と捉えておく。

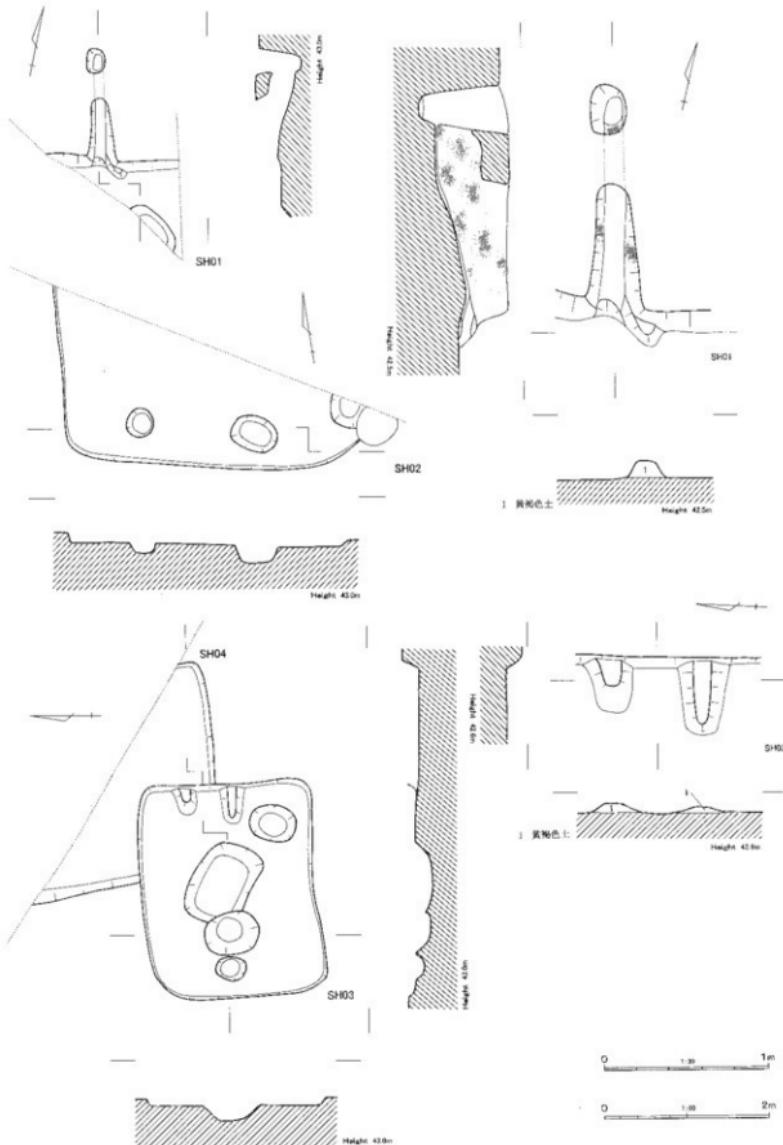


Fig. 6 竖穴建筑物实测图

SH03 平面形は不整形であるが長方形を意識した堅穴建物である。建物規模は南北2.1m・東西2.65mであり、切り合い関係からSH04よりも新しいと判断できる。建物に伴うと考えられる土坑・小穴が検出されたが、その機能は明確ではない。竈は東壁中央部のやや北側で検出された。竈の遺存状況は良好ではなく、袖の基底部付近が検出されたのみである。

出土遺物からは明確な時期の定点を見出し難いが、周辺の遺構状況から9世紀後半頃と推定される。

SH04 堅穴建物としてここでは報告するが、明確に建物跡と捉えられる根柢が薄弱であり、遺構の性格は断定し難い。遺構の規模は東西2.5m、平面形はやや不整形であるが、長方形を意識したものと推測される。竈・貼床・礎溝などは確認されなかった。切り合い関係ではSH03に切られている。

出土遺物のなかで建物の時期認定として明確に示し得る資料はないが、周辺の遺構状況を勘案して9世紀代の建物と捉えておく。

土坑（SK01～04） 調査区東側の低位面で1基（SK01）、調査区西側の高位面で3基（SK02～04）を検出した。

SK01は長軸1.26m・短軸0.88m、検出面からの深さ26cmの隅丸長方形を呈する土坑である。遺物は土坑底面ではなく、上面中央部から出土している。遺物には6枚の貨幣が出土しており、上から天祐通寶（表・天聖元寶（表・篆書）・天聖元寶（裏・真書）・洪武通寶（裏）・元祐通寶（表・行書）・元祐通寶（表・篆書）であった。六道錢と考えられることからSK01は土坑墓と捉えられ、17世紀初頭頃と考えられる。

SK02は一辺0.96m、検出面からの深さ11cmの隅丸方形を呈する土坑である。SK03は西半が調査区外のため規模等は判然としないが、形態は円形となる土坑と推定される。検出面からの深さは10cmである。SK04は土坑の一部分を検出したのみであり、規模・形態は不明である。検出面からの深さは12cmであった。SK02～04からは遺物が出土していないため、帰属時期を明確に提示することはできないが、これまでの調査成果から近世に時期的な中心をもつ土坑墓と推定される。



Fig. 7 SK01（北から）

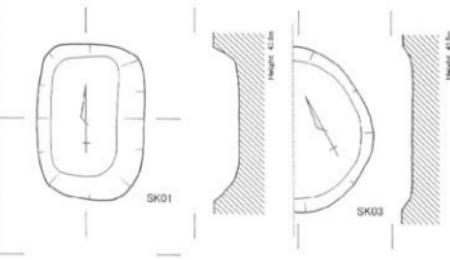


Fig. 8 SK02（北東から）

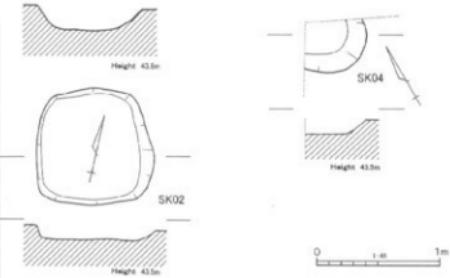


Fig. 9 土坑実測図

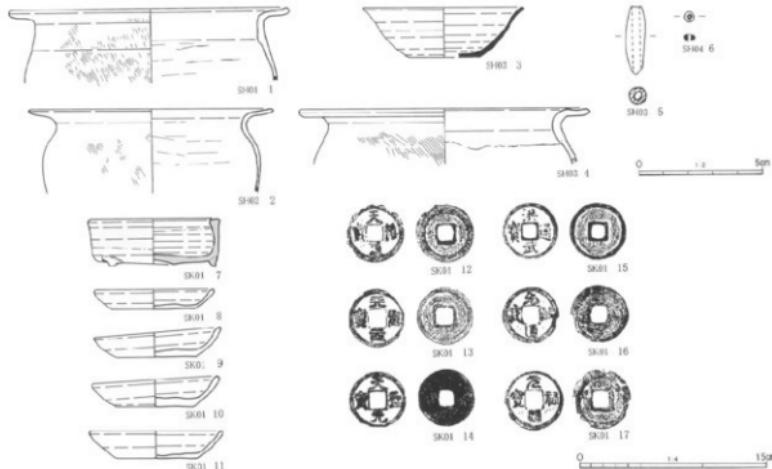


Fig. 10 出土遺物

2 出土遺物

豎穴建物出土遺物 1はSH01から出土した土師器甕である。口縁部は水平に引き出され、端部がやや摘み上げられている。2はSH02から出土した土師器甕である。

3～5はSH03から出土した遺物である。3は底部が小さく口縁端部が外反する形態となる須恵器碗である。4は土師器甕、5は土錘である。

6はSH04から出土したガラス小玉である。周辺の古墳群から混入したものであろう。

SK01出土遺物 SK01からは7～17の遺物が出土している。7は胴部と底部の境に三足が付された志戸呂の香炉、8～11はロクロ成形のかわらけである。8～10の底部外面には糸切り痕が明瞭に確認できる。

12は1017年初鑄の天禧通寶、13・14は1023年初鑄の天聖元寶である。15は1368年初鑄の洪武通寶、16・17は1086年初鑄の元祐通寶である。

第3章 総括

宮裏遺跡は、旧石器時代から中・近世まで続く複合遺跡である。今回の調査では、古代と近世に関しての資料を得た。報告の最後に、調査成果の牧之原台地東縁部における位置付けと今後の展望について示す。

古代 9世紀を中心とした堅穴建物を4軒検出し、宮裏遺跡における集落の諸施設を追加する資料を得た。建物構成・出土遺物を勘案すれば、宮裏遺跡は一般的な古代集落遺跡であると捉えられる。

宮裏遺跡が立地する牧之原台地東縁部では、宮上遺跡・青木原遺跡・中原遺跡と周辺の遺跡が相互にどのような関連を有していたかが常に注視されてきた。宮上遺跡を中心に隣接する3遺跡をここでは宮上遺跡群と仮称するが、宮上遺跡群の建物構成はこれまでの調査成果から堅穴建物が卓越する地域であることが判明している。初倉驛家の存在を立証する資料とされてきた宮上遺跡の「驛」墨書き土器・青木原遺跡の円面鏡は、いずれも建物構成を反映して堅穴建物より出土している。宮上遺跡で検出された掘立柱建物群は平安時代中期の建物であり、初倉驛家と積極的に関連づけることは時期的に困難である。つまり、宮上遺跡群では官衙的機能を想定できるような掘立柱建物群は現在まで検出されていないのである。したがって、現状では建物構成を顧みず少數の特殊遺物のみに注目した評価は慎重であるべきで、今後の調査による宮上遺跡群の総合的な検討が必要である。

改めて宮裏遺跡の様相をみると、堅穴建物は7世紀末葉頃までは高位面に立地し、8世紀段階で低位面に展開することが既に指摘されている（井鍋2006）。今回の調査でもこの動向を確認できたが、集落の拡大が南東方向であり、その先には台地を開析して形成した湯日川が流れ、湯日川右岸の段丘上には竹林寺廃寺跡を中心とした遺跡群が位置している。宮裏遺跡は宮上遺跡群とは異なる段丘上に立地する点からも、湯日川流域遺跡群の動態を考慮する視点が求められるであろう。

近世 土坑墓を4基検出し、特にSK01では六道鏡が揃って出土するなど、台地上における近世の具体的な様相を窺える資料を得た。

宮裏遺跡の南側に隣接する高根森遺跡では中・近世の建物遺構が多数検出されており、集落の中心域が存在することが判明する。棹秤用の鍤が出土していることから、高根森遺跡が物資集散機能を有していたと捉えられ、宮裏遺跡も高根森遺跡をはじめ周辺の遺跡群との動向を広域に整理していく必要があるだろう。

参考文献

- 井鍋誉之 2006 「宮裏II遺跡・高根森遺跡・高根森古墳群」 静岡県埋蔵文化財調査研究所
勝又直人 2002 「中原遺跡・宮裏遺跡」 静岡県埋蔵文化財調査研究所
斎藤 忠・平野吾郎・馬剣野行雄・瀧谷昌彦 1980 「竹林寺廃寺跡」 島田市教育委員会
坂巻隆一・朝比奈太郎 2000 「青木原遺跡」 島田市教育委員会
静岡県教育委員会 2003 「静岡県の古代寺院・官衙遺跡」
静岡県考古学会 2006 「古代の役所と寺院」
籠ヶ谷路人・田畠佐栄子 1996 「青木原遺跡」 島田市教育委員会
籠ヶ谷路人 2001 「中原遺跡・宮上遺跡発掘調査報告書」 島田市教育委員会
瀧谷昌彦・坂巻隆一 1990 「宮上遺跡・尼沢遺跡」 島田市教育委員会
島田市企画調整部 1983 「しまだの自然環境」
島田市教育委員会 1996 「島田風土記－ふるさと初倉－」
鶴野雄康 1998 「御小屋原I遺跡・中原遺跡」 島田市教育委員会
鶴野雄康・籠ヶ谷路人 1999 「宮上遺跡」 島田市教育委員会



1 調査前全景（東から）



2 調査地区全景（西から）



3 SH01（南から）

PH.2



1 SH02 (西から)



2 SH03・04 (西から)



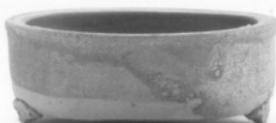
3 SK03・04 (東から)



1 垂穴建物 出土遺物



10-10



10-7



10-9



10-12



10-13



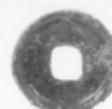
10-14



10-9



10-15



10-16



10-17

2 SK01 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みやうらいせき 3												
書名	宮裏遺跡Ⅲ												
副書名	平成19年度 (主)島田吉田線緊急地方道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書												
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告												
シリーズ番号	第179集												
編著者名	丸杉俊一郎／平塚智久												
編集機関	財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所												
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL 054-262-4261 (代表)												
発行年月日	2007年9月28日												
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因					
		市町村	遺跡番号										
みやうら 宮裏遺跡	しづかわらん 静岡県 しまだ 島田市 ときわ 阪本	22209	世界測地系		20070413～ 20070512	242m ²	道路改築工事 (平成19年度(主)島田吉田線緊急地方道路改築事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査						
			34°	138°									
			48'	12'									
			32"	53"									
			旧日本測地系										
			34°	138°									
			48'	13'									
			20"	4"									
			所取遺跡	種別				主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
			宮裏遺跡	集落				奈良時代～平安時代	堅穴建物4軒	土師器・須恵器			
墓地	江戸時代	土坑墓		近世陶器・土師質土器・錢貨									
要約	宮裏遺跡は旧石器時代～近世にわたり断続的に集落が営まれた複合集落遺跡である。奈良時代～平安時代にかけての堅穴建物が4軒検出され、窓が良好に遺存する建物が確認された。近世には墓地が展開し、六道鏡と捉えられる錢貨が出土している。												

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第179集

宮裏遺跡Ⅲ

平成19年度 (主)島田吉田線緊急地方道路改築
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成19年9月28日

編集・発行 財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL (054)262-4261 (代)
FAX (054)262-4266
印 刷 中部印刷株式会社
〒432-8052 静岡県浜松市南区東若林町1516-2
TEL (053)441-2431 (代)

